

# 将軍家宣の帰依

大正大学教授 玉山成元

祐天寺にはすばらしい七条の袈裟が残っている。うすい茶地に金襴の唐艸（つる草）を織り込み、その上に白・緑・オレンジ・黄のあざやかな桐葉をおいたものである。着地は上等の紗で、裏地も極うすい紗である。これが落ちついた紺の縁江にかぶさっているため、部分的に紺地の上に、金襴の唐艸が浮き出て、みごとに調和をたもっている。さらに緋色の修多羅（ひも）が強いアクセントとなつて全体をひきしめ、環は本象牙の上に鹿の皮を張り、その上を紺と朱とオレンジの線で幾何学的な模様をあしらっている。本当にこまかなところまで気をくばった上品な袈裟である。こんなすばらしい袈裟は今とても作れないであらう。一見はなやかに見えるが、どことなく落ちつき、あきのこないデザインである。能の衣装を思わせるような感じがする。おそらく夏物の打掛を袈裟に仕立てたものではないか。いかにも大奥からいただいたものらしい。

『祐天寺記録』によると正徳二年（一

七一）三月、祐天上人は大奥へ召され、金襴の織物をいただき、それで、九条・七条・五条の三つの袈裟を仕立て、法事のときや、江戸城に行かれるときに着用されたという。祐天寺に残っているすばらしい袈裟は、このときのものであろうか。祐天上人と大奥の関係はふかい。五代将軍綱吉の母であった桂昌院は、上人が牛嶋に隠遁され、多くの人々を教化してしたわれた噂をきき、使いを出して浄土宗の教えをたずねられ、祐天上人に帰依するようになった。そうしたことから将軍綱吉にはたらきかけ、元禄十二年（一六九九）二月四日、特別のはからいで、生実大巖寺（千葉市）の住職となった。さらに翌年七月には飯沼弘経寺（水海道市）住職となり、宝永元年（一七〇四）十二月には小石川の伝通院の住職となった。これらの寺々はいずれも檀林寺院といい、多くの坊さんが修行する寺であった。今でいえば学校の校長といつてもよい。ことに伝通院は増上寺につぐ重要な学問所であった。伝通院に入ると、よく

大奥に召されて、浄土宗の教えを講義するようになり、大變尊ばれるようになった。そして、増上寺門周上人や先住の雲臥上人と同じような待遇を受けるようになった。いや増上寺の大僧正以上に尊敬されるようになった。そのため宝永二年六月二十二日、桂昌院がなくなつたときには、特別に祐天上人が大奥へよばれ、桂昌院に「南無阿弥陀仏」のお十念を授け、善知識となつている。それ以後はますます将軍の信任をえ、大奥からも信頼されるようになった。六代将軍家宣もこのほか祐天上人に帰依され、上人をよく江戸城に召し、浄土の教えを聞かれることが多かった。そしてお十念をうけ、日課念仏まで誓約された。だから息子の家千代（智幻院）や大五郎（理岸院）がなくなつたときにも祐天上人が導師となつて葬儀をすませ、伝通院に葬ることになった。そればかりでなく、先になつた清寿院や清華院をも伝通院に改葬し、祐天上人を導師としてご供養している。将軍家宣の帰依はそればかりでなく、つ

# 將軍家宣の帰依

大正大学教授 玉山成元

いに祐天上人を増上寺の住職にし、破格の待遇をするようになった。

正徳元年十二月六日、家宣は江戸城黒書院に祐天上人を召し、じきじきに増上寺の住職を申しつけ、即座に大僧正に任命した。こんなことは増上寺はじまって以来のことである。当時祐天上人は七十六歳の高齢であった。元氣とはいえず、やはり高齢である。家宣は上人の体を心配し、一節の杖と頭巾をプレゼントし、自分の前でもそれを使用してよいという許可を与えている。一節というからには竹の杖であろう。まことに珍しいもので、おそらく輸入物であろう。風邪をひいては困ると思ったのであろう。將軍の前で頭巾をかぶりながら話しあうなどということは、当時の世相からは大破格で、常識では考えられないことである。そのくらいだから、家宣が紅葉山のお霊屋（増上寺）へ参詣するときでも、めんどろくさいしきたりの作法はしなくともよいといっている。いかに祐天上人を尊敬していたかがわかる。

おそらく家宣は自分の余命がないことをさとっていたらしい。それで祐天上人に自分の生命を預ける心境になっていたであろう。祐天上人も鎌倉の大仏様を復興して家千代や大五郎の菩提を弔うとともに、將軍家宣の息災をも祈ったことであろう。しかし、正徳二年十月に入ると様態が悪化した。祐天上人は家康の念持仏であった黒本尊を江戸城に安置し無事を祈った。同月十四日家宣はじっくりと黒本尊を拝み、祐天上人から授けられたお名号と数珠をもち、お十念を授かって五十一歳の生涯をとじた。おそらくこの時も拝領の着地で仕立てたすばらしい袈裟をつけていたことであろう。自分がもつとも信頼し、尊敬し、生命も預けた祐天上人にみとられてこの世を去った家宣はしあわせであったろう。家宣の葬儀は、本来ならば智恩院のご門主が導師となつて行うべきであるが、おそらく家宣の遺言であろうか。法親王の格式で祐天上人が導師を仰せつけられ、葬儀が行われることになった。おくる方も、おくら

れる方も感慨無量であったに相違ない。